令和3年度　学校自己評価及び学校関係者評価表　　武蔵村山市立第一中学校

経営理念	学校像　（1）基礎的・基本的な学力の定着や体力の向上を目指し、授業の充実・改善を図り、心身ともに健やかな生徒が育つ学校 （2）地域との連携を図り、地域から学び、地域に貢献できる生徒が育つ学校 （3）道徳的心情や道徳的実践力を身に付けることを目指し、心豊かな生徒が育つ学校

【学校運営協議会・会長】小泉　亨
学校運営協議会（学校評価分）第１回　7月２０日（火）
第２回　9月２５日（火）
第３回　2月１５日（火）

	経営目標（中期・短期を明記）	目標達成のための方策	評価指標	自己評価：目標値 9月達成値	目標値 1月達成値	最終評価 達成度	最終評価 評価	分析コメント(学校関係者評価委員会の意見、児童・生徒評価、保護者評価等の意見について、参考にする。)	改善策(来年度の目標設定、具体記な取組目標)	学校関係者評価：意　見	評価点（4点満点）
確かな学力の向上	【共通】全生徒に対しての基礎学力の定着　短期	・eライブラリアドバンスを活用した家庭学習推進に全校体制で取り組み、年度末には継続して活用している生徒8割以上を目指す。 ・地域未来塾を活用した補充教室や質問教室を実施する。（地域未来塾年間７０回以上実施。うち20回は夏休み補充教室として実施する。）	・地域未来塾の実施回数 ・eライブラリの継続実施割合（アンケート） ・教員の自己評価 ・生徒の学校評価 ・保護者の学校評価	80	70	88	A	・eライブラリアドバンスの学校内での活用は進んだが、家庭学習推進には至らなかった。 ・地域未来塾の活用は進み、年間60回の補充教室を実施できた。特に3学年の受験対策のための『基礎力アップ教室』は、充実した内容となっている。	・日常的にタブレットの持ち帰りを可能にして、eライブラリアドバンスを宿題にし、全校的に家庭学習の習慣付けを行う。 ・来年度は、年間８０回以上、地域未来塾を活用した補充教室を行う。年間通して行う『基礎力アップ教室』を2年生にも導入する。	・生徒も保護者も、継続して安心して勉強できる学校環境ができていると感じている。その中で生徒の学習意欲を一層高める、また家庭学習を充実させる取り組みをお願いする。	3.3
	教員の授業力向上　中期	・年2回の道徳授業の研究を通して教員同士の交流をさらに深め、授業改善を進めていく。 ・教科年間計画を週案に添付させて、管理職が毎月進行状況をチェックして教育課程を適正に管理する。 ・GIGAスクール構想1年目として、全教員にタブレット活用授業を1回以上実施させ、管理職が観察する。	・タブレット活用授業の実施回数 ・教員の自己評価 ・生徒の授業評価 ・保護者の学校評価	90	90	100	A	・年2回の道徳授業研究は、教職員からも好評で、特に特別支援学級の授業案を通常の教員がともに作り、授業を行い、その結果について討論することによって、交流を深め互いの理解を大きく進めた。 ・行事が大幅に縮小されたため、授業は十分に実施できた。 ・GIGAスクール構想1年目で手探りの中、全教員が授業で1回は活用できた。家庭持ち帰りに向け準備している。	・道徳の研究を2年間実施し、大きな成果を得た。来年度はICT教育の推進をテーマとする。 ・来年度、行事が通常モードになるにつれ、授業時間確保と適正な教育課程の管理が求められるはずである。週案を通しての管理職による確認を続ける。	・公開授業の様子からも、生徒の理解を進めるための授業に向け、すべての先生が創意・努力されていることが感じられる。	3.7
	校内研究による生徒の変容　長期	・年3回の一中校区授業交流を実施し、『学力（特に数学）』『ICT教育』『道徳』の共通課題に対して現状の共有と具体的な対策を最低１つスタートさせる。 ・校内研究を『道徳』と『ICT教育』の2本立てとし、毎月研修会を実施してその成果を日常の授業に生かす。道徳地区公開ではICTを活用した道徳授業を行う。	・校区3校で具体的な対策に取り組めたか ・道徳地区公開の外部評価（保護者・学運協） ・教員自己評価 ・生徒学校評価	80	70	75	B	・校区3校揃っての授業交流が年間で1回しか行えなかった。『学力』の課題について一中と一小では協議する機会をもてたが、特に九小との交流が不十分だった。 ・2本立ての校内研究はかなりハードで、道徳にICTを活用するのは現状難しかった。ICTが手段ではなく、目的になってしまう場面が見られた。	・3校合同の授業交流では、管理職同士がまず理解を深め合い協調して小中の連携を進める必要がある。市の学力向上委員会の取組と連動して学力向上に努める。 ・学校関係者評価でも出ているように、ICTに関する教員のスキルや活用状況に大きな個人差がある。日常的に使えるように、教員の研修を進める。	・ICTの活用面では、先生間でのばらつきが見られる。先生・生徒の双方が工夫して、機器の活用やコンテンツの充実を図って欲しい。	3.2
豊かな心の育成	【共通】いじめ撲滅への取組　短期	・ネットに関するモラルを高めるため、保護者・教職員への研修と生徒への教育の機会を全校体制でつくり、年1回以上の実施を定例化し、深刻なネットトラブル発生０を目指す。 ・生徒会主催の「いじめ撲滅キャンペーン」を年2回実施する。	・研修の実施回数 ・教員の自己評価 ・生徒の学校評価 ・保護者の学校評価 ・学校運営協議会の評価	90	75	88	A	・PTAの意見も取り入れ、保護者への啓発を研修会への参加ではなく、ネットモラル動画の紹介とし、親子で夏休みに『SNS家庭ルールの見直し』を宿題としたところ、深刻なネットトラブルは０だった。 ・アンケート結果で『一中は楽しく安心して過ごせる』の肯定率が親子とも約９５%に達している。	・PTAと連携した親子ぐるみのネットモラル教育を、ICT委員会の仕事の１つとして、継続して行う。 ・伝統的に続く一中の安定した状況をこれからも継続していく。	・生徒・保護者共に高いレベルで安定して「一中は安心で楽しい」と感じている。引き続き先生・生徒一体で活動を進めて欲しい。	3.5
	特別な支援を要する生徒への対応　中期	・校内委員会を月2回に増やし、1回は特別支援教室入退級判定会議とし、もう1回を不登校生徒対策会議として、不登校問題に対して組織的に対応できる体制をつくる。 ・SCや巡回心理士の専門性を生かせる場面を増やし、特に保護者相談の件数を倍増させる。	・不登校生徒20名以内 ・保護者相談件数前年比倍増 ・教員の自己評価 ・学校運営協議会の評価	90	70	88	A	・校内委員会は月2回とすることで、不登校対策として、予兆が表れている生徒への対策を早めに行うことにつながった。サポート教室利用者も着実に増加している。 ・SCの保護者相談件数が昨年度の4倍になった。巡回心理士による教員への研修も行った。	・校内委員会の開催方式は来年度も継続する。不登校生徒はコロナ禍が原因で増加傾向にあるため、さらに予兆を早くつかみ、校内委員会で協議して一人一人への支援を急ぐ必要がある。 ・SCや巡回心理士の活動の幅を更に広げるよう、授業への参加の機会を提案する。	・不登校等へ対応する体制がきちんとできており、生徒や保護者からも相談できる環境が整っている。	3.8
	挨拶をよくする生徒の育成　長期	・「あいさつ運動」への教員参加を定着させ、生徒会と連携しながら挨拶をする機運を高める。 ・キャリア教育と連動して『社会人としてのマナー』のひとつとしての挨拶の重要性を学ばせ、地域行事やボランティア、校外活動の中で実践させていく。	・「あいさつ運動」への教員参加人数のべ100名以上 ・生徒の学校評価 ・保護者の学校評価 ・学校運営協議会の評価	80	65	88	A	・「あいさつ運動」への教員参加は定着しつつあり、それに伴い、ボランティア生徒も増えて、『よくあいさつをしている』の生徒評価は肯定率8割を超えた。 ・コロナ禍で、職場体験や訪問の機会がなく、社会における実践をする機会に恵まれなかった。来年度は復活できることを期待する。	・教職員が積極的にかかわる「あいさつ運動」を継続する。 ・キャリア教育の一環として、『社会人としてのマナー』を学ぶ機会を、総合的な学習の時間に位置付ける。	・校内で地域の方へ積極的に挨拶する生徒が増えており、「あいさつ運動」での雰囲気づくりの成果が出ている。	3.2
健やかな体の育成	オリンピック・パラリンピック教育の推進　中期	・7、8月の酷暑の時期にオリンピック・パラリンピックの観戦が予定されている。実施された場合には、生徒たちにとって生涯の思い出となるように、参加者全員が安全に観戦を実施できるように万全を尽くす。 ・一中の伝統となりつつある『ダンス』授業を中心に、生涯スポーツにつながる体育教育を目指していく。	・体力テスト結果の変容 ・教員の自己評価 ・生徒の授業評価 ・保護者の学校評価	80	68	68	B	・オリ・パラ観戦が実現せず、本当に残念だった。1か月前までは会場への移動計画を立て、全ての準備は整えていた。 ・『ダンス』の伝統は引き継がれ、このコロナ禍でも3月に発表会を行うことができた。体育の『器械体操』の単元で、オリンピアンを招待しての出前授業も行った。	・オリ・パラのレガシーを継続して残すため、一つは『障碍者教育』として、現在チィキチィキフェスティバルの「ユニバーサルデザイン」講座を拡大していく。 ・体育の授業の中で、『ダンス』の伝統を続けていく。今まで『オリパラ推進』としてついていた補助金が出なくなるため、講師料を教材費として個人負担とする。	・新型コロナの影響で実施できず、大きな機会を逸したことは残念だった。	3.0
	特別活動の充実　長期	・体育的行事や部活動については、昨年度同様新しい生活様式の中で無理のない計画を立て、生徒の満足感が最大限引き出せるような活動にしていく。 ・コロナ収束後は例年に準じたボランティア活動を再開させる。	・部活動ガイドラインに沿った部活運営が100%為されているか ・教員の自己評価 ・生徒の学校評価 ・保護者・学運協の評価	75	68	86	A	・部活動はほぼガイドラインに沿った運営がなされており、保護者からの苦情も大幅に減った。運動会もこの2年で縮小した方式も確立してきて、かつての規模での開催を見直す時期に来ている。 ・ボランティア活動はほとんどの機会が奪われた形になり、残念だった。	・5月開催のため、規模縮小はやむを得ないが、生徒の満足感を高めるための方策を学校として早めに検討していく。 ・コロナ収束に伴い、復活したボランティアの機会を逃さず、部活動にも平等に分担しながら、人数を確保していく。その上で純粋なボランティア参加者を増やす。	・コロナ禍で行事・活動が制限される中で、運動会などでは生徒たちが工夫しながら充実したものを作ることができた。 ・各種行事の中止に伴う生徒の心のケアをお願いする。	3.3
信頼される学校	地域行事やボランティア活動への積極的な参加　短期	・コロナ沈静後は、生徒会主催でボランティア参加者を募り、実施後には見える形で参加者を評価する場面をつくり、ボランティアへの参加意欲を高める。 ・ボランティア活動の様子をツイッターやHPを通じて積極的に発信する。	・自主的な参加者数の増加 ・生徒の自己評価 ・地域・保護者の評価 ・教員の自己評価	70	55	64	B	・ボランティアの機会は8割がた奪われて、残念だった。 ・ツイッターを通じて継続的に活動をアピールすることをICT委員会の役割に位置付ける。	・アンケートでも親子ともにボランティアへの意識の低さが表れている。ボランティア年間計画を配布して、年度当初に参加を呼び掛けたり、生徒会を通じて参加者を表彰したり、ツイッター等で広報したり等、活動への意欲を高める試みを複数実施していく。	・実際の地域活動やボランティア活動への参加が難しい状況が続いているが、コロナ禍が落ち着いた時にどういった活動に参加していくかを調査・立案して、活動への意識を高める努力をお願いする。	3.0
	地域の人材を活用した教育活動の実践　中期	・地域人材を活用できる最大の行事である『チィキチィキフェスティバル』を感染対策を万全にした上で実施する。PTAとも連携して新規講座を増やし生徒の体験の幅を広げてさらに地域とのつながりを深める。 ・学校運営協議会を学校行事の日に当て、行事の参観を通してより現状を把握したうえで協議を深める。	・外部人材活用の実施状況（講師人数） ・教員の自己評価 ・生徒の学校評価 ・学校運営協議会の評価	85	55	94	A	・感染対策をしながら「チィキチィキフェスティバル」を開催したが、生徒の満足度は大変に高く、講師からも意欲的な生徒の態度に好評を得て、大成功し、地域とのきずなを深める大きな機会となった。 ・学校行事の日に学校運営協議会を開催するようにしたためか、毎月の協議会参加率も上昇した。	・次年度以降も「チィキチィキフェスティバル」を大切な学校行事として継承していく。前述した「ユニバーサルデザイン」講座等、生徒全員に体験させたいものについては、出前授業等を検討していく。 ・学校運営協議会開催予定を次年度も学校行事に重ねた。学校の実態を見ていただく機会を増やしていく。	・チィキチィキフェスティバルを再開して、生徒たちが地域の人・文化・技能等に触れ合う機会を復活できた。引き続き新型コロナ感染状況を注視しながら、機会を増やして欲しい。	3.8
	特別活動の充実 広報活動の強化　長期	・ICT委員会を立ち上げてホームページの更新やツイッター発信を月2回以上行い、リアルタイムな広報活動を強化する。 ・全校的に取り組んできている実行委員組織や班長会等の取組は継続し、さらに若手教員の学級経営を手助けするための研修の機会をつくる。	・情報発信回数 ・研修実施回数 ・教員自己評価 ・生徒の学校評価 ・保護者の学校評価 ・学校運営協議会の評価	80	53	75	B	・学校の情報発信については、親子ともに肯定率が１０%程度上昇しているものの、自由記述欄でもっと発信してほしいとの意見も多くみられた。HPもツイッターも定期的に更新されているとはいいがたい状況である。 ・自治的な活動についてはアンケートで約９０%の肯定回答を得ている。	・HPとツイッター更新は、ICT委員会に専属して行う部署を設ける。生徒会とも連動させて、『楽しい、ためになる情報を素早く』をモットーに情報発信を進める。 ・運動会や合唱コンクール、校外学習など、すべて実行委員会組織で動かすノウハウが学校の中で引き継がれている。この流れを大切につなげていく。	・学校からの情報発信は少しずつ頻度・量が拡大できてきている。保護者、地域も含めた双方向の情報交換に役立てるよう相互に工夫していきたい。	3.3
										平均値	3.4